希望を耕す

# 大阪万博の時代

神戸芸術工科大学 学長
松村 秀一
Shuichi Matsumura

## 一九六九年の紅白歌合戦

今年はラジオ放送開始から丁度一〇〇年ということらしく、建国記念日の午後にはNHK総合テレビで、何故その年かはわからなかったが、一九六九年の第二〇回紅白歌合戦をノーカットで放送していた。当時小学六年生だった私は、それこそ茶の間にいてリアルタイムで観ていたはずの紅白である。どんな歌手が出ていたっけと、思わず三時間画面に釘付けになってしまった。

初出場は、紅組がいしだあゆみ、奥村チヨ、カルメン・マキ、高田恭子、森山良子、由紀さおり。白組がザ・キング・トーンズに内山田洋とクール・ファイブ。司会は二十二歳で既に七回目の出場だった伊東ゆかりと二十八歳で九回目の出場の坂本九、そしてかつては紅白の司会と言えばこの人というNHKアナウンサー宮田輝。まだ、五木ひろしも八代亜紀も小林幸子も郷ひろみも小柳ルミ子も和田アキ子も、もちろん石川さゆりや森昌子も現れていない。そんな時代である。海の向こうでは、数年前に世界的なブームを巻き起こしたザ・ビートルズが事実上の解散寸前の時期になっていたのだが、日本の紅白はまだ世代交代しきっていないところもあり、私の生まれる前のヒット曲「お富さん」を春日八郎が歌っていたりもした。

とにもかくにも、私はずばりこの番組の制作陣の狙った世代だったのだろう。自慢ではないが、すべての曲を口ずさむことができた。

## ひかれる後ろ髪

この連載はおいくつくらいの方々が読まれているのだろうか。「読んでるよ」と声掛けしてくださるのは、ほとんどが先輩方なので、安心しきってここまで話を進めてきた。だが、二〇代～五〇代の方が読まれていたとしたら、あまりにも知らない固有名詞ばかりが出てくるので、自分たちが住んでいるのとは違うパラレル・ワールドがあるのではなかろうかと混乱させてしまったかもしれない。そうだとしたら御免なさい。一九六九年、それは六十七歳の私のような者が後ろ髪ひかれる時代なのである。

七〇%近い視聴率だっただろうこの紅白歌合戦の約三カ月後、一九七〇年三月十五日に大阪万博が開幕した。これも私はずばりの世代。同じ年頃の方と話すと、先ず一度は行っているし、関西在住の方の場合三度は行っている。アメリカ館には月の石があったとか、ザンビア館には何があったとか。何時間並んで何を見たとか。あれが実は黒川紀章だったんだよねとか、磯崎新だったんだよねとか。五五年経ってもみんな記憶が生き生きとしているのには驚かされる。さっき会った人の名前すら思い出せない程度の記憶力なのにである。

一九七〇年の大阪万博の勢いを象徴する人物として私たちの記憶に残っているのは、その後ベストセラー小説をものにした万博の事務局とブレーン、ともに大阪出身の二人、堺屋太一と小松左京である。

万博の五年後に堺屋太一が世に問うたのが、石油の絶たれた日本の姿を描いた「油断！」。そして、万博の何年も前から書いていて一九七三年にようやく出版された大作が小松左京の「日本沈没」だった。こちらはまさに日本列島が海に沈み、日本人が自分たちの土地を失ってしまうという、日本を代表する圧倒的なSF作品であった。

太陽の塔の勇姿は今訪れても変わっていない（写真提供：大阪府）

余談になるが、この「日本沈没」に出てくるマッド・サイエンティスト風の地球物理学者田所博士の台詞の数々は、偉人の名言のようで心に染みるものであった。映画では小林桂樹が演じていた。

## メイク〇〇△△アゲン

今から振り返って興味深いのは、「人類の進歩と調和」をテーマにしたこの大阪万博が高度経済成長期に計画され、そこに深くかかわった二人が、その祭りが終わるや否や、「進歩と調和」からはかけ離れた国家の非常事態を描いて大きな話題を呼んだ事実である。時代の転換をこれほど見事に象徴した事柄はなかっただろう。

そして今、二〇二五年の大阪・関西万博が始まった。五五年前とは全く違う。今回は、目に見える形では決して勢いづいていない時代のなかでの万博である。一部にはトランプ大統領の「メイク・アメリカ・グレイト・アゲン」と同じように、今回の万博に「夢よ、もう一度」の類の期待を寄せている向きもあると聞く。だが、一九七〇年の大阪万博の後には「油断！」と「日本沈没」が、そして高度経済成長期の終焉があった。

かつて万博の行われた場所には、いま一人岡本太郎の太陽の塔が太古からそこにあったかのように超然として聳える。その周りは広々して気持ちの良い公園になっているが、生き生きとした人々の集う会場に三度も足を運び色々な展示施設の列に並んだかつての少年の頭には、芭蕉の「夏草や…」の一七文字が浮かぶ。

万博のお隣でホテルや商業施設等が次々と建設されていた千里中央駅前では、かつての中心的な大規模施設が空きビル化していると聞く。

「いのち輝く未来社会のデザイン」を掲げる今年の万博に行くのも楽しみだが、その後に馳せる夢が、かつての高度経済成長のような景気ではなく、時代に相応しい何かに化けることを願いたい。今回は祭りの後にどんな小松左京が現れてくれるだろうか。とても楽しみである。